

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#22 フィレンツェでの結婚式

結婚式場を探す

娘の結婚が決まった時に、娘と新郎君から式場について相談を持ちかけられた。「イタリアで挙式をあげたいと思う…」と。私のイタリア好きは他人からも溜息つかれるほどではあるが、偶然新郎一家もイタリアに長期滞在していたなど馴染みがあり、両者その血を譲っていたようで、私はその申し出に即座に賛成の意を伝えた。

調べてみるとイタリアには素晴らしいヴィラの結婚式場が数多くある。リゾートにも都市周辺にも優雅なヴィラでの結婚式がパッケージとなっている。北イタリアの湖水地方、例えばコモ湖では映画に出てくる様なシ

チュエーションの優雅なヴィラで挙式を挙げる事が出来る。ヴェネツィアではジョージ・クルーニーのように運河沿いの教会で挙式を挙げ、マホガニー製ボートでパーティー会場へ移動するという様な演出も可能だ。

候補地としてコモ湖もあったが、最終的にフィレンツェの街を見下す素晴らしい16世紀の貴族のヴィラを娘が探しあてた。そこは通常ヴィラホテルとして運営されているので特に結婚式のパッケージといったものがない。そこで娘と新郎君の奮闘が始まる事となる。

結婚式コーディネーター

二人は予算のことも考えて、自分たちで

全てのコーディネートをすると決めた。ヴィラを全て借り切れる日程を押さえる事から始まり、彼らのイメージを具現化してくれそうなアーティストやチームを探し出し、直接コンタクトをし始めた。

並行してタイムスケジュール検討や会場セッティング、ケータリングメニュー、カトラリーやランプなどの装飾に至るまで事細かにそれぞれ請け負ってくれることになったチームへイメージを伝え、コーディネートするこだわり様で、まさに仕事よりも真剣に仕事をしているような、そんな数ヶ月間に見えた。

ウエディングドレスはイタリアでは代々受け継ぐ風習があるからなのか、なかなかレ



広大な敷地内のごじまりとした教会は、少人数でのセレモニーにはうってつけに思われた。ヴィラの本館と純白なウエディングドレス姿とのコントラストの美しさに、思わずシャッターを切ってしまった。フィレンツェの街を見下ろす庭でのディナーのテーブルセッティングは娘の感性でセレクトし、参加者のネームカードも手作りだった。

ンタルでは見つからずフィレンツェで仕立ててもらい、指輪はボローニャで見つけた職人さんにオーダー、ヘアメイクはスイスから、フォトグラファーとフラワーアーティストはフィレンツェから、ミュージシャンはトリノからと、フィレンツェを中心に各地から協力を得て形にしていった。引き出物は彼らが以前製作工場まで出向き、仲良くなった革工房ペローニ3代目の計らいで、革製品の全てにゲストの名入れを依頼するといった徹底ぶりだった。

一度、二人で下見と打ち合わせを兼ねてイタリアへ出向くことにはなったが、メールやskypeでの打ち合わせで形が出来てしまうとは、さすがは現代テクノロジーだと実感した。

結婚式と披露宴

中世貴族のヴィラには自分達のための小さな教会があるので、敷地内のそのチャペルで結婚式は執り行われた。陽差しの強い日で、風が丘を撫でるたびに汗を乾かすようなそんな天気にも恵まれた日だった。チャペルでのセレモニー後は木陰でフィンガーフードとフランチャコルタを振る舞い、夜はフィレンツェを見下ろすガーデンディナーとなった。フィレンツェの街に火が灯る頃、ケーキカットと花束投げのセレモニー。夜景の美しいガーデンでのドルチェとヴィンセントを楽しみながら、ダブルベースのライブが色を添えたパーティーは深夜まで延々と続いた。

彼らの奮闘の結果、親戚や友人達とアット

ホームな雰囲気の中、些細な演出やこだわりが随所に見える素敵なセレモニーとなった。私としてはイタリアンワインとイタリアンのフルコースをたらふく頂いても、寝床が会場にある安心感は特別だった。

翌朝、濃厚なエスプレッソで昨夜の酔いを吹き飛ばし、2泊3日滞在したヴィラを後にして、新郎新婦と両親2組、親戚、友人と2台の車に分乗して新婚旅行のスタートと相成った。PB.

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。



中世ルネッサンスの発祥の地フィレンツェには、多くの有力貴族が市街を見下ろす小高い丘に別荘としてのヴィラを建てた。結婚式の為に借りきったのはそんなヴィラの一つで、ヴェネチアン様式を取り入れた建物や庭は当時の貴族の思い入れが随所に見る事が出来、中世の香りだたよう別世界の様な佇まいを見せていた。